

福井英一郎先生を偲ぶ

東京教育大学（現 筑波大学）名誉教授福井英一郎先生は、平成12年（2000年）11月3日、肺炎のため逝去された。明治38年（1905年）福岡市で誕生され、享年95歳、天寿を全うされた。先生は、誕生から旧制福岡高等学校卒業まで、福岡市で生活されたが、東京帝国大学理学部に進学され、地理学科を昭和3年に卒業されてから、ほとんど東京に居住された。

その後の10年間は、研究や教育などで、いろいろ経験されたが、やがて時局の急変に伴って、昭和17年に気象技師として、中央気象台の勤務が、昭和23年まで続いた。この間に中国の華北観象台の副台長（日本人の職員の長）として終戦前後の中国で苦勞された。帰国後は福岡管区気象台の調査課長を務められたが、昭和24年（1949年）に東京教育大学教授にまねかれて、昭和44年（1969年）に定年を迎えられるまで、御自身の研究と学生の教育に力を注がれた。その後は東京成徳短期大学の教授などを勤められた。

先生はわが国における気候学の研究・教育の開拓者であり、指導者であった。それは、1971年日本気象学会の先生に対する藤原賞の受賞理由「日本における気候学研究とその体系化ならびに気候教育に貢献した業績」によく表わされている。先生の研究分野は気候学全般に及んでいるが、まず第一に1938年に刊行された“気候学”が挙げられる。気候学については、それまでにわが国では、体系立った気候学の教科書あるいは、専門書がなかった。先生は、J. ハン、および A. デファントと E. オプスト共著の気候学を参考にして、7年の歳月を費して完成した。この本は、その後のわが国の気候学の発達の原動力となった。

その後、東京教育大学では、20年の間に多数の門下生を育てられた。講座の演習を学外者に公開し、気象庁などからも、数名の参加者があった。この研究会は、気候談話会という名称で、広く関係者に親しまれた。先生御自身の話によると、気象庁に在職された期間が短くて、岡田武松、藤原咲平両先生に御恩返しができなかったのが、その償いの意味も含めて、気候学の研究や学位論文の指導をするということであった。先生の研究指導は他人の真似のできないところで、年下の研究者や、学生に対する助言は、“人を見て、法を説く”という諺どおり、絶妙なものであった。御自身の研究



は、大気候から小気候まで、多岐にわたり、印刷された論文数は、100編以上に達するが、その他に単行本や講座の類も多数あるのが特徴である。高齢になられても、気候学に対する情熱は、衰えなかった。門下生を集めて、専門書を次々と作られた。数年前に安成哲三教授を紹介かたがた先生のお宅に伺ったところ「共著で、気候学の教科書を書きたい」と意欲を見せておられた。常日頃私に「人間は引っ込み思案になっては駄目だ。前に出なければ！」と言っておられた先生のお声が聞こえてくるように思われる。また先生は文筆に長けておられたが、読書が何よりもお好きであった。今も、おそらくあの世で読書三昧に耽けておられるだろう。御冥福をお祈り申し上げます。

なお、福井英一郎先生の長年にわたる功績を顕彰するため正四位勲三等旭日中綬章を追賜されました。

（筑波大学名誉教授 河村 武）

参 考 文 献

- 福井英一郎、1938：気候学、古今書院、566pp.
- 福井英一郎、1971：気候学50年の歩み、天気、18、386-394.
- 福井英一郎、1991：ある老学徒の半生、気象旧友会だより、平成3年8月号、11-12.
- 福井英一郎、1991：ある地理学徒の半生、地理、36(1)、60-66、(2)、58-65.
- 1969：福井英一郎先生略歴・著者目録、東京教育大学地理学研究報告、13、1~7.